

日本

宗西禅師八百年大遠諱
宗西と禅の世界

禅宗の 勃興

釈迦牟尼が開いた仏教が中国を経て日本にもたらされたのは六世紀頃のこと。中国では達磨大師を始祖とする禅宗が大陸全土へ伝播し始めていた時期でもあった。と同時に、日本にも中国からの渡来僧らによって細々と禅宗が伝えられてはいたが、本格的に禅宗が国内で根付いていくのは、鎌倉時代以降のことである。



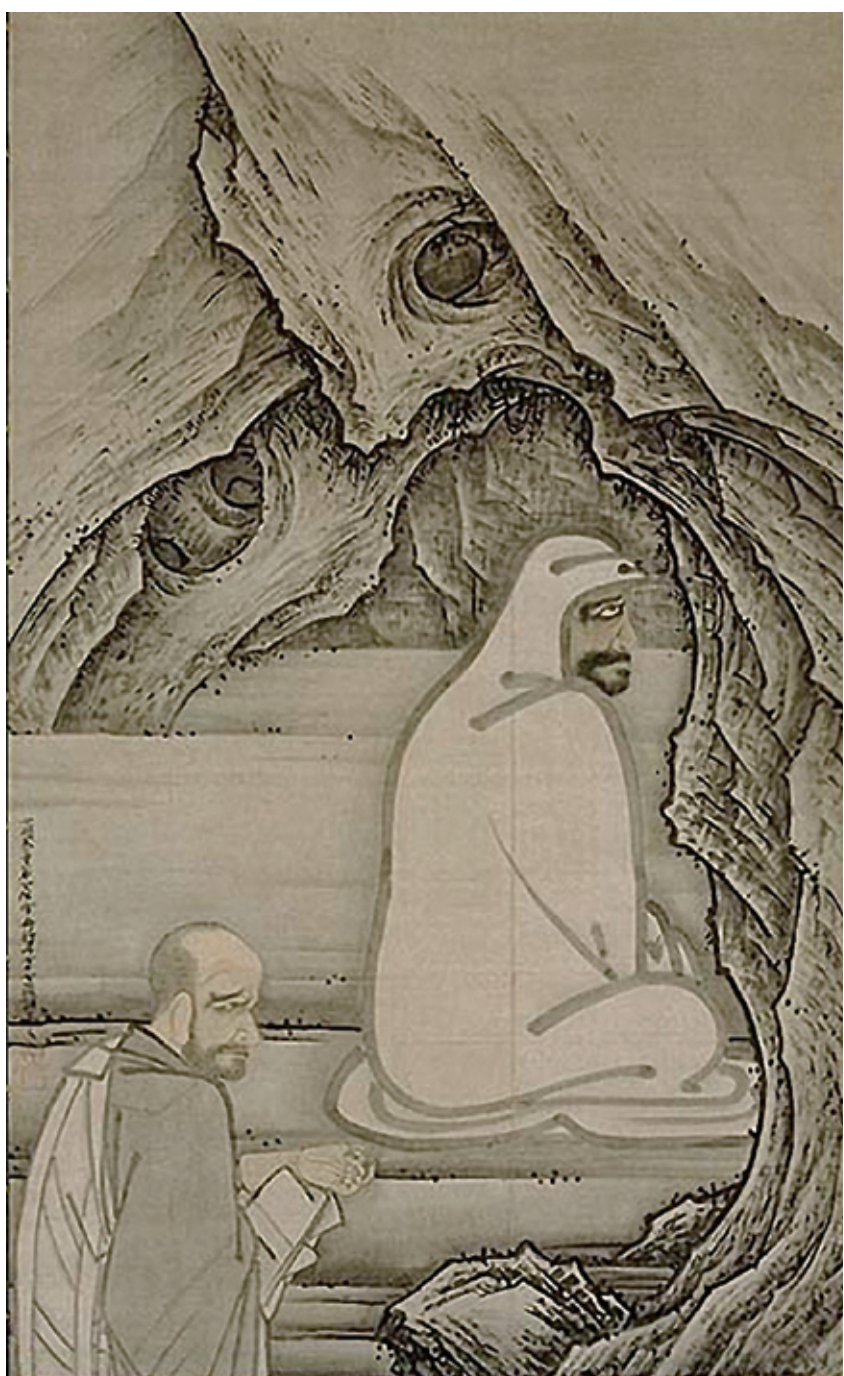
禅宗とは何か

中国で起こった禅

言うまでもないが、仏教を開いたのはお釈迦様である。釈迦牟尼（俗名ガウタマ・シツダールタ）は、紀元前7〜5世紀頃、現在のインドとネパールの国境付近で暮らしていた、シャーカー族の王子として生まれた。裕福な家に生まれ、何不自由なく暮らしていたが29歳で出家。難行苦行を続けても救いの道を見いだすことができず、菩提樹の下で瞑想に入り、ついに大覚（悟り）を成就された。35歳のことだったという。これが、すべての禅宗の源流となる。

禅宗の初祖は、波斯国（ペルシヤ）から150歳で中国に渡来した達磨大師と言われている。達磨大師に関しては、さまざまなエピソードや伝説が語られてきたため、架空の人格のように思われる面もあるが、6世紀頃の中国に実在した僧である。伝承によると、達磨大師は527年に南海から広州に上陸後、釈尊の正しい教えを伝えるため、梁の都である建康（南京）で武帝と問答したが、話が噛み合わず嵩山少林寺へ去ってしまった。

少林寺に入った達磨は、9年にわたってひたすら壁に向かって坐禅を修したとされる。後に「面壁九年」



雪舟筆『慧可断臂図』 慧可という僧が、少林寺において面壁坐禅中の達磨に参禅を請うたが聞き入れられず、慧可は自分の左腕を切り落として禅道入りの決意を示し、ようやく入門を許されたという一場面を、禅僧だった雪舟が晩年の77歳に描いた作品とされる。

菩提樹の下での、
釈尊の大覚成就が
禅のルーツ



嵩山少林寺 中国河南省鄭州市登封に位置する中岳嵩山の中の少室山の北麓にある中国禅の古刹で、世界遺産に指定されている。インドから渡来した達磨大師による禅の発祥地として知られる。



845年、唐の武宗が仏教弾圧を行う（会昌の破仏）。これは仏教そのものを弾圧したわけではなく、銅銭不足で逼迫した財政状況を立て直すための経済政策の一環だったと考えられているが、その影響が及んだ北宗禅は、次第に勢いが衰えていく。これに対して、弾圧の影響が少なかった南宗禅は生き残り、慧能が六祖となつて後世に脈々と伝承され続ける禅宗の祖と仰がれることになる。

五家七宗の誕生

10世紀に入ると、南宗禅はますます隆盛を誇り、中でも慧能の直弟子・南嶽・懷讓（677-744年）弟子の馬祖道一（709-778年）、同じく慧能の直弟子・青原行思（?-740年）弟子の石頭希遷（700-790年）の2流が最も栄えた。慧能の孫弟子にあたる石頭希遷と馬祖道一は、それぞれ門下で多くの門弟を集めて一大

勢力を成し、「二大甘露門」と言われた。そして、中国の各地では石頭希遷の系統から洞山良价を祖とする曹洞宗、雲門文偃（864-949年）を祖とする雲門宗、法眼文益（885-958年）を祖とする法眼宗が誕生した。また、馬祖道一の系統からは、潯山靈祐（771-853年）と弟子の仰山慧寂（802-882年）による潯仰宗、臨濟義玄（?-867年）を祖とする臨濟宗が、それぞれ誕生した。

さらに宋代になり、勢いの盛んだつた臨濟宗から楊岐方会（992-1049年）の楊岐派、黄龍慧南（1002-1069年）の黄龍派の2派に分かれた。中国で起こつた禅宗の系統は、曹洞宗・雲門宗・法眼宗・潯仰宗・臨濟宗を五家、それに楊岐派・黄龍派の2派を加え、総称して「五家七宗」と呼ばれるようになった。

と言われる逸話で、禅画の題材として好んで描かれている。

達磨大師が大成した禅宗

「本来、清浄な自性に目覚め、成仏せよ」と達磨大師が説いた禅宗は中国全土へ広まっていく。中国の禅宗は、初祖達磨に始まり、

二祖慧可ー三祖僧璨ー四祖道心ー五祖弘忍と受け継がれていった。7世紀になり、五祖弘忍の門下から神秀と慧能という優れた弟子が輩出されたことよつて、中国北部の長安や洛陽に禅宗を広めた神秀の「北宗禅」、中国南部で活動した慧能の「南宗禅」とに分かれた。

「無生心」・「無住心」

禅の目的 釈尊は厳しい難行苦行をしても救いの道が開けず、菩提樹の下で坐禅をしたことで大覚に至つた。自らの内にある清い心信じ、清浄なる心に目覚めることで、釈尊の悟つた仏心へと至ることができる。すなわち無生心（心になにも生じることのない空無の状態）、無住心（心が箇所に留まることなく自由な状態）の境地に達することである。やがてそれが単純化され、無心という言葉に集約された。

達磨より六代目にあたる
六祖慧能の代以降、禅宗は
五家七宗に分かれていく

日本に禅宗が広く普及したのは、鎌倉時代の栄西による。しかし、禅宗はそれ以前にも日本に渡ってきており、6世紀の欽明天皇の時代まで遡ると言われている。

禅宗が日本に伝来したことを確認できる歴史的史料『続日本紀』によると、白雉4年(653)唐に渡った道昭(629-700年)が帰朝後、飛鳥・元興寺の一角に禅院を建てて坐禅したとある。道昭は『西遊記』で広く知られる玄奘三蔵に師事して法相教学を学んだ。また、河南省の隆化寺・慧満のもとで禅を学んでいる。道昭は法相教学の初伝にとどまらず、熱心な禅の修行者でもあった。文武天皇4年(700)3月10日、72歳の生涯を閉じたときも、繩床の上に端座したまま息絶えていたという。そして、遺命によって火葬されたが、日本で初めて火葬された人とも言われている。

道昭より遙か以前、禅宗との関わりがあったとされる聖徳太子にまつわる伝説が残っている。達磨大師が来日し、飛鳥時代の皇族で摂政の聖徳太子(574-622年)と相まみ

海を渡った禅の教え

日本禅宗の黎明期



photo by alio

聖徳太子肖像画
しょうとくたいししやうが

用明天皇の王子で、推古女帝の皇太子として摂政となる。仏教を国の宗教と宣告したことから、日本仏教の初祖と仰がれる。四天王寺(大阪府)や法隆寺(奈良県)を建立し、仏教の興隆に寄与した。

飛鳥時代に伝来した日本の禅宗は、栄西によって開花した



高野山金剛峯寺 こうやさんこんごうぶじ
弘仁10年(819)、弘法大師空海が修行の場として開いた高野山真言宗の総本山。和歌山県伊都郡高野町にある高野山内には、100を超える寺と宿坊がある。



比叡山延暦寺 ひえいざんえんりやくじ
延暦7年(788)、伝教大師最澄が一乗止観院を開いたことに始まる天台宗の総本山。滋賀県大津市坂本町にあり、東塔、西塔、横川など、三塔十六谷の堂塔の総称。



最澄と空海 さいしやうくうかい
平安時代の僧。両者とも遣唐使船に乗って唐に渡り、最澄は天台宗を、空海は真言密教をもたらした。日本仏教史を飾る平安仏教界の双璧として、比較されることが多い。

に「一乗止観院」を建立し、延暦23年(804)に入唐。天台山上に登り天台教学や菩薩戒を学ぶ

時を同じくして、最澄と激しい論争を戦わせた真言宗の祖・空海は、延暦23年(804)、長安で密教を学ぶため入唐。帰国した空海は高麗山寺に入り、嵯峨天皇の帰依を受け本格的に真言密教の布教に乗り出す。同時に、中国で盛んだった禅宗の情報を嵯峨天皇などに伝えていることから、禅宗の片鱗に触れていたことは確かであろう。

鎌倉時代前期には、大日房能忍(生没年不詳)が独学で禅を学び、

最澄と空海の禅

天平8年(736)、唐から来朝した道璿は、華嚴宗とともに禅宗を日本に伝えている。そして、道璿がもたらした禅宗は、弟子の最澄へと受け継がれていくことになる。

天台宗の祖・最澄(766?767-822年)は延暦4年(785)、東大寺で具足戒を受ける。延暦7年(788)、比叡山延暦寺

林寺の脩然から初期禅宗一派の牛頭宗の教えを受けた。

最澄は、円(法華円教)・戒(菩薩戒)・禅(禅宗)・密(密教)を統合すること、すなわち「四宗相承」を天台宗の立場とした。その後、天台三代座主・円仁や天台寺門宗祖・円珍などが入唐の際にも重要な禅宗典籍などを持ち帰り、天台宗の内に、脈々と禅宗に対する関心を受け継がれていったのである。

日本に伝来した初期の禅宗は、中国渡来の仏教の一部でしかなかったため、国内で広がりを見せることはなかった。そして、日本に禅宗を根付かせたのが、明庵栄西(1141-1215年)である。

達磨大師の四聖句①

「不立文字」

文字や言葉では、釈尊の悟りの内容は表現できない。しかし、文字や言葉で否定しているわけではなく、表現に限界があるからこそ、大切に扱わなければならないという逆説的肯定の意味も含んでいる。

達磨大師の四聖句②

「教外別伝」

釈尊の教えを大成した經典以外に、別の教えがあるわけではない。しかし、それは文字だけでは伝えきれないからこそ、日常の修行の中から釈尊の悟りを直接体験によってつかうのである。

達磨大師の四聖句③

「直指人心」

人の心と仏心は別のものではなく、我々の心の中にもともと仏心が具わっているものである。これを忘れるから迷いが生じる。だからこそ、真っ直ぐに「自分の心が仏心にはかならない」と指し示すのだ。

達磨大師の四聖句④

「見性成佛」

言葉や文字で表現できない仏性は、自分の中にある。人間の本性のなかに真の人間性、仏性を見ることが、成仏(人間を完成成就させる)することである。

日本で発展した三大禅宗

達磨大師によって中国に伝えられ発展した坐禅を、教義の中心に据えた禅宗だが、日本においては、臨済宗・曹洞宗・黄檗宗の3宗がある。

日本には、5世紀頃から中国から来朝した僧によって禅宗が伝えられてきたが、広く禅宗を広めたのは、鎌倉時代、臨済宗開祖の栄西による。

臨済宗が鎌倉幕府の庇護を受け、宗教教団の一つとしての地位を確立して以降、中国から優れた禅僧が日本に渡来し、禅宗の普及に大きく貢献した。臨済宗は、14派(妙心寺派、建長寺派、円覚寺派、南禅寺派、方広寺派、永源寺派、佛通寺派、東福寺派、相国寺派、建仁寺派、天龍寺派、向獄寺派、大徳寺派、國泰寺派)に分かれ、寺院数7674カ寺、信者数110万7700人にのぼる。

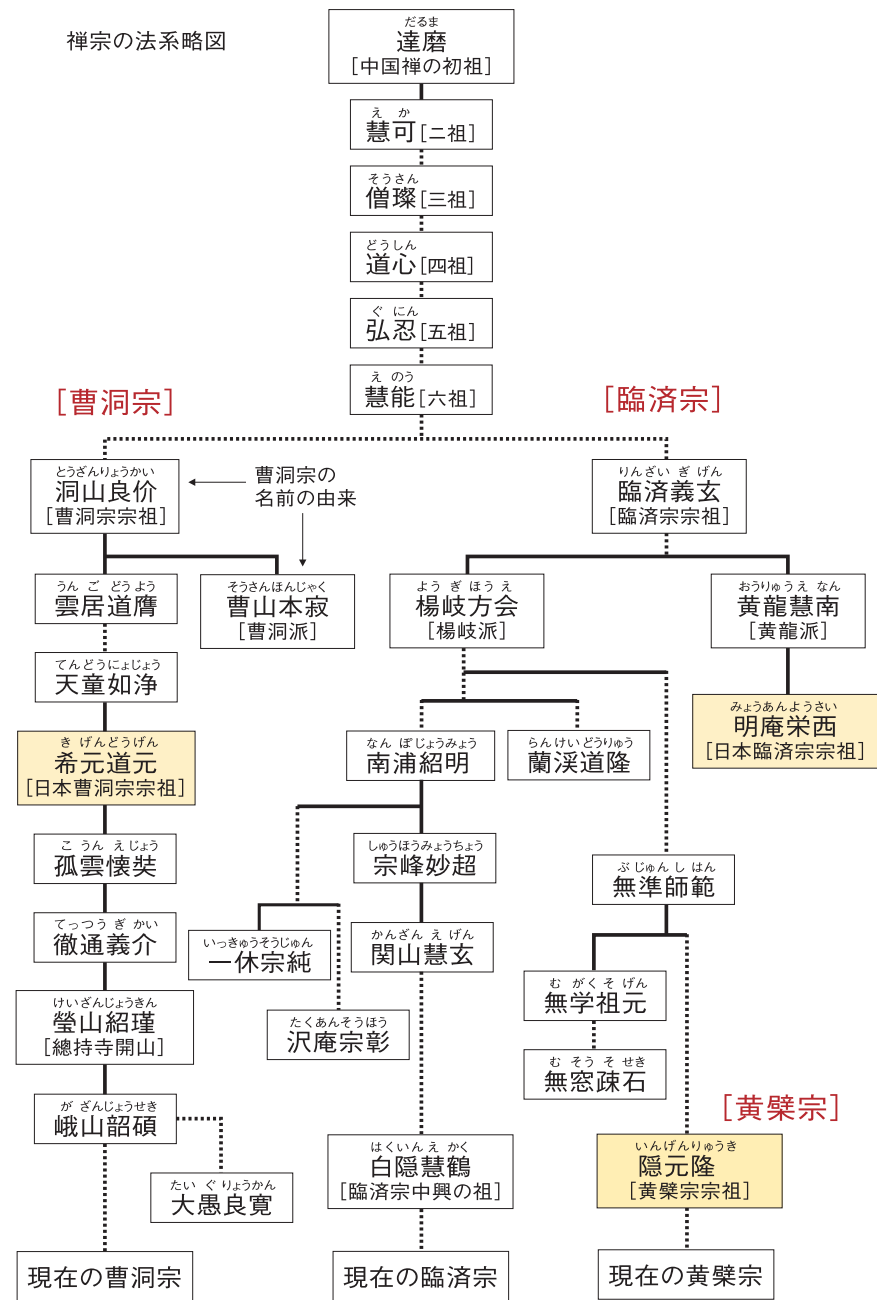
栄西の示寂後、道元が曹洞宗を開く。曹洞宗は、永平寺と総持寺を大本山として、寺院数1万4597カ寺、信者数155万4194人と、三宗の中で最大の教団に発展した。

江戸時代になり、中国渡来の僧・隠元が黄檗宗を開く。黄檗宗は、萬福寺を大本山として、寺院数454カ寺、信者数30万人となっている。(宗教統計調査・平成22年12月31日現在)文化庁文化庁事務課より)

日本禅宗の勃興

日本の三大禅宗

臨済宗・曹洞宗・黄檗宗



日本に伝来した禅宗は、
おおいに発展し、
独自の道を歩み続ける

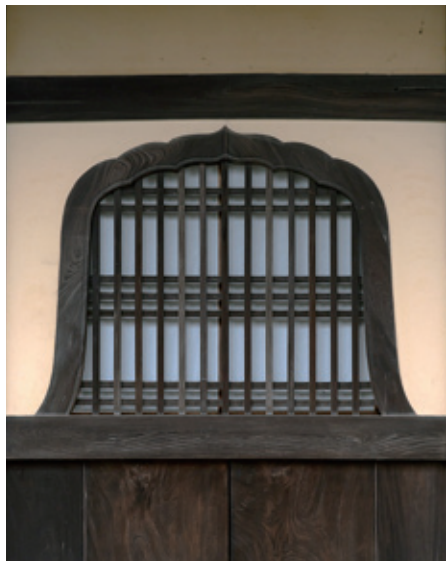
地に達することを目指している。その過程は、芸術や文化を高める精神性にも共通する。

栄西は、日本に飲茶の文化を普及させた「茶祖」と言われる。栄西が著した『喫茶養生記』には、茶の健康効果が医学的見地から紹介されているが、それはやがて作法を重んじる禅と融合し、茶道という道を開いていった。他にも、武道、華道、書道など、「道」の世界の発展に多大な影響を与えている。

高度な精神性を探究する芸術家や文人墨客、思想家のサロンとなった禅寺は、禅の精神に芸術を究めるヒントを与えていたのかもしれない。

現在、中国における禅宗の勢いは、日本と比べると劣ると言われている。それは、日本人が禅宗を単なる一宗教として受け入れたのではなく、その深い精神性に共感を抱いたからに他ならない。

さらに言えば、禅宗は今日の日本人の心そのものを確立した宗派と言えるのではないだろうか。



花頭窓 禅寺建築様式の特徴をなす飾り窓 (写真は南禅寺法堂)

禅の精神世界

禅宗は、美術・書・食・建築・庭園など、日本の精神文化にも多大な影響を与えた。他の仏教宗派にも優れた仏教芸術や精神文化は、あまねく存在するが、禅宗からの影響は甚だ顕著である。それは、禅の教えに起因すると言える。

禅は、坐禅を通じて自身の内面にある仏性を発見することにあると説く。すなわち、自己の精神性を高めることによって、釈尊が悟られた境



黄檗宗

大本山 | 萬福寺 | 1661年、宗祖 | 隠元隆琦[1592-1673]、本尊 | 釈迦如来、所在地 | 京都府宇治市五力庄



曹洞宗

大本山 | 永平寺・総持寺 | 1244年・1321年、宗祖 | 希元道元[1200-1253]・瑩山紹瑾[1268-1325]、本尊 | 釈迦牟尼仏、所在地 | 福井県吉田郡永平寺町・神奈川県横浜市鶴見区鶴見



臨済宗

大本山 | 建仁寺 | 1202年、宗祖 | 明庵栄西[1141-1215]、本尊 | 釈迦如来、所在地 | 京都府京都市東山区大和大路通四條下る

坐禅の目的

坐禅は、本来誰でも心の奥に持っている仏性を自覚するため、身心を清浄な状態に保ち、自己と向き合うための手法といえる。

お釈迦様がブツダガヤの菩提樹の下で大悟され、釈尊の教えを継ぐ26代目にあたる禅の始祖・達磨大師は、天台山で「面壁九年」を修した。また、達磨大師から六代目にあたる慧能禪師は、「外、一切の境地に於いて信念起こらざるを名付けて坐となし内、自性を見て動ぜざるを名付けて、禅となす」と記している。（六祖大師法宝壇経（六祖壇経）より）。ど

日本禅宗の勃興

4

坐禅の目的と作法

各宗派による作法の違い

のような環境の中で生きようとも、左右されない心が「坐」。自らの心内にある仏性を信じて疑わないことが「禅」なのだという。

看話禅と黙照禅

禅宗の基本は坐禅であるが、臨済宗と曹洞宗とは根本から大きく異なる。臨済宗は、「看話禅」が基本である。黄檗宗も臨済宗の流れを汲む宗派であることから看話禅ではあるが、黄檗宗の開祖・隠元が来朝した当時の中国では、禅と念仏を兼修した「浄禅一致」を説いていたため、隠元もこの考え方を踏襲した。ゆえに、黄檗宗は「念仏禅」になる。曹洞宗は「黙照禅」である。この「看話禅」と「黙



建仁寺本坊方丈 海北友松作の「雲龍図」が襖8面に描かれた客間で参禅する。

「照禅」は、どのように違うのであろうか。

「看話禅」の看話とは、話（公案）を看すること。つまり、公案を重視し、研究を深めることによって大悟に至ることをめざしている。

公案とは、禅の修行者を悟りへと導くために師家から与えられる課題（問題）のようなものであり、その多くが無理難題である。一般にいう「禅問答」という言葉は、公案に由来する。代表的な公案に、「隻手の声」「狗子仏性」「祖師西来意」などがある。看話禅は、公案禅とも呼ばれる。

「黙照禅」は、中国宋代曹洞宗の僧・宏智正覚（1091-1157）が示した「黙照銘」の言葉に由来する。曹洞宗の開祖・道元は、「所謂坐禅は習禅には非ず。唯だ是安楽の法門なり、菩提の究尽する修証なり（坐禅をすること、それ自体が悟りである）」と「普勸坐禅義」に記している。

曹洞宗の坐禅は「只管打坐」を基本とし、ただひたすら坐る。何か他に目的を達成する手段として坐禅を

するのではなく、坐禅をする姿そのものが「仏の姿」であり、悟りの姿だという考え方に基づいている。

それぞれに違う坐禅の作法

悟りを目的として坐禅をする看話禅。坐禅そのものが悟りであるとする黙照禅。また、両者は坐り方もまったく違う。看話禅は、修行者が対面して座るのに対し、黙照禅は壁に向かって坐禅を組む。無論、坐する向きが違うので、修行者を戒めるために肩ないしは背中を叩く警策（臨済宗では「けいさく」、曹洞宗では「きょうさく」）の作法も異なる。食事の作法一つとっても、臨済宗には食堂があるのに対し、曹洞宗は僧堂で行う。食事も修行の一つと考えているためだ。

禅宗は、達磨大師にはじまり、それぞれの宗派に枝分かれしていった。根本にある原理や到達すべき目的は一緒だが、そのプロセスにおいて独自の考え方もって発展し、今日に至っているのである。

清浄な心と身体で
自身に内在する
仏性と向き合う



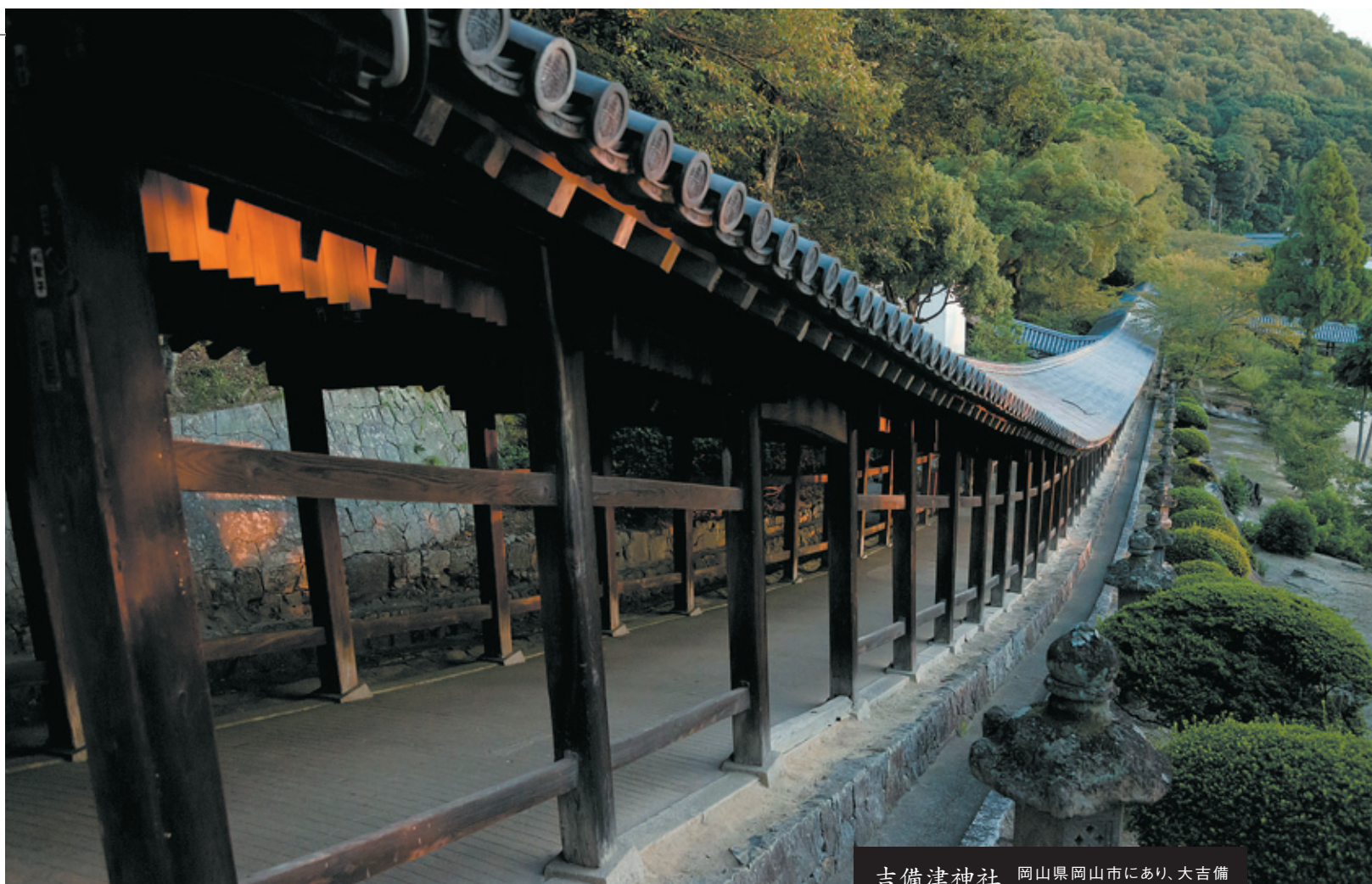
禅堂 京都市東山区にある東福寺の禅堂は、興国7年(1347)に再建された我が国最大最古、そして唯一の坐禅道場と言われる。



天龍寺暁講座 京都市右京区嵯峨の天龍寺で定期的開催されている、一般者を対象とした坐禅会



本坊 建仁寺の庫裏。拝観者の入り口にもなっている。
ほんぼう



吉備津神社 岡山県岡山市にあり、大吉備津彦大神を主祭神として祀る。
きびつじんじや



柝
たくしき

茶礼などが行われる際に合図として打ち鳴らされる拍子木。禅寺では、さまざまな日常生活を営む際の合図に、開板、雲版、巡照板などが鳴らされる。

禅を日本に広めた臨済宗の開祖

栄西 Yosai

日本禅宗の勃興

4 日本
の禅宗を
開いた宗祖たち

備中・吉備津宮の神官の子として生まれ、若くして仏道を志し、比叡山で密教僧として大成するも、2度の渡宋を経て、禅僧となった栄西。鎌倉幕府の庇護のもと日本に禅宗を普及させ、その後の日本仏教界に新しい風を起こした。

日本における臨済宗の開祖・明庵栄西は、保延7年（1141）4月20日、備中・吉備津神社（岡山県岡山市）の権禰宜（神職）であった賀陽氏の子として生まれた。幼名は千壽丸といった。

栄西の出生に関しては、他の偉人と同じく逸話が伝わる。栄西の母親が吉備津宮の支神楽神廟に祈りを捧げると、ある夜に明星の夢を見て子を孕み、8カ月を経て明星の出現とともに栄西を出産した。「期を満たさずに生まれた子は、父母の利にあらず」として3日間も乳が与えられなかったが、栄西は泣きもしなかつ



絶海中津梵「明庵栄西像」室町時代初頭の臨済宗の僧で、善堂周信とともに五山文学の双璧をなす絶海中津「建武元年（1334）〜応永12年（1405）」の賛が記された栄西の肖像画。現存する栄西禅師の像としては、最古の作とされている。

たというのだ。事の真偽は別として、幼少からある種の宿命を背負ってこの世に出たことを印象づけるエピソードである。

わずか8歳で出家を決意し、11歳のとき安養寺（岡山県岡山市）の僧侶静心に師事。14歳を迎えた久寿元年（1154）、比叡山延暦寺で得度受戒。栄西と名乗った。

天台宗を建て直そうと南宋留学を決意

比叡山に登って修行をはじめた後、父が園城寺（三井寺）の出身だったこともあり、栄西もまた園城寺で台

比叡山延暦寺にのぼり
天台密教を学んだ栄西は、
祈祷僧として活躍する



比叡山延暦寺根本中堂

延暦7年(788)、最澄が比叡山にのぼり「兼止観院(いちじょうしあんいん)」を構えたことに始まる1200年以上、絶えることのない不滅の法灯のもと、天台僧が修行を行う延暦寺の総本堂。



園城寺金堂

天台宗門派の総本山。日本四箇大寺の一つで、天智・天武・持統天皇の産湯に用いられた冷泉があることから「御井(みい)の寺」、三井寺と呼ばれるようになった。

密三井寺流を学んでいる。

栄西が比叡山で有弁に従って台密を学んでいた頃、長年仏教界の頂点に君臨した天台宗は、形骸化が進んでいた。幼少の頃から仏道を志し、いざ比叡の門を叩いてみると、そこには権力と結びつき世俗化してしまった僧たちのサロンと化していた。その荒廃ぶりを目の当たりにした栄西の失望ぶりは、相当のものであったであろう。

後に著した『興禪護国論』の中で、自分の禅こそ、伝教大師最澄と同じ禅戒一如の禅だと言い、自分はひたすら天台宗の立て直しと国家安泰をめざしていると、栄西を弾圧する現勢力に反論している。

20代後半を迎えていた栄西は、すべての原点に立ち返ろうと最澄が学んだ中国の天台山への留学を決意する。仁安2年(1167)、栄西は伯耆国(鳥取県)の大山寺を訪れ、基好上人から天台密教を伝授される。

栄西

禅を日本に広めた
臨済宗の宗祖

book

その翌年、九州へと渡り阿蘇山にて入宋祈願を行う。2月に博多に到着、太宰府天満宮に入り出発までの間、渡海祈願を行った。

栄西が南宋留学で得たものは？

仁安3年(1168)4月3日博多の袖湊から商船に乗って出帆し、4月24日明州(寧波)に到着。上陸した栄西は、偶然にも後に東大寺復興の大勸進となる重源上人と出会う。2人は一緒に阿育王寺へと向かった。最澄が学んだという天台宗の根本道場である国清寺にやってきました栄西が見たものは、禅宗一色に変わった密教寺院の姿だった。当時の南宋では禅宗が盛んで、最澄が訪れた時代とは大きく様変わりしていたのである。

失望感を禁じ得ない栄西だったが、天台山万年寺や阿育王山阿育王寺などを訪ね歩いていく。結局、栄西は思うような成果を得られず、わずか4ヵ月半あまりの滞在で、同年9月、帰国の途についた。

帰国に際し、天台の典籍『新章疏』30余部60巻を持ち帰り、天台座主の明雲に献上している。明雲は、栄西の留学を支援した一人である。最澄が開いた天台宗の源流に身を置いて、

大いなる哉心や、天の高きは極むべからず。
而るに心は天の上に出づ。地の厚きは測るべからず。
而るに心は地の下に出づ。

釈迦の大いなる心は、天の高さより高く地の厚さより厚いものである、と仏教の偉大さを語り、この力をもって護国と安泰を願いたいと、栄西は『興禪護国論』の冒頭に記している。また、栄西はこの書を通じて比叡山延暦寺からの批判に対し、自身の禅は最澄の教えと致しており、批判はあたらないと反論している。

栄西禅師修行の地

ようさいぜんじしじゅうのち

比叡山で受戒した栄西が修行したとき
される庵はないが、東塔にある入り口前
の駐車場から山道を少し下った山中
に、栄西修行の地の碑が立っている。

もう一度純粋な教義でもって薄汚れた比叡山を浄化したいと考えていた榮西の目論見は肩すかしにあつてしまった。しかし、榮西は秀でた宗教者である。南宋で流行した禅に対して、心を動かさなかつた訳がない。現に、南宋滞在中には、方々の禅利を尋ねて禅に関する知識を学びとつ

ている。その意味で、榮西の1回目の渡宋は下見のようなもので、本番は2年後の2回目の渡宋と言えるかもしれない。
虚庵懷敵禅師より
印可状を授かる

1回目の渡宋から20年後の文治3

鎌倉幕府に接近し、
禅宗の普及に力を注ぎ、
その地位を確立する



天台山万年寺
中国浙江省天台縣万年山麓に位置し、南宋時代には中国の五山十刹に数えられた名刹。およそ1600年前、東晋年間(363-365年)に甘肅省敦煌からゆくとんごうの僧雲猷(くわんぐ)と轉者が万年山の麓に茅屋(ぼうおく)を建てたことに始まる。



阿育王山阿育王寺
中国浙江省寧波市太白山の麓に位置し、中国五山のついに数えられる阿育王寺は西晋太康3年(282)に創建された禅寺で、榮西が訪れた時は中国五山制度確立前であるが、すでに臨済宗の大道場として栄えていた。

是れ即ら法を持する者の法室を滅し、
我にあらざる者の我心を知らんや。
ただに禅関の宗門を塞ぐのみにあらず、
そもそもまた叡嶽の粗道を毀る。
慨然、悄然たり、是なるや非なるや。

榮西は『興禅護国論』の中で、比叡山からの批判に対し、「仏法を守ろうとする者の教えを滅ぼす」「私の思いなど、そのような人々には分からない」と自らの思いを吐露し、その中には最澄の教えをも貶おとしめるものだ、まったく嘆かわしいと、かなり厳しい口調で反論している。

榮西の言葉 ●『興禅護国論』より

年(1187)、47歳になつていた榮西は再び南宋を目指した。目的地は天竺(インド)。天台の源流をさらに遡って、仏教の源流であるお釈迦様の境地に近づきたいと考えた榮西は、南宋を経て海路で渡るつもりであったが、政情の不安を理由にその願いは叶わず、一度は帰国の途につく。しかし、乗った船が嵐に遭い、命からがら瑞安の湊に漂着した。

鎌倉幕府の庇護を受け
禅の普及に尽力
宋で4年の歳月を過ごした榮西は、建久2年(1191)7月、天童山で学んだ臨済禅や手に入れた多くの什物を携えて帰国した。日本に戻つた榮西は、九州を活動の拠点に禅宗の普及に乗り出す。時期を同じくして、広がり始めていた日本達磨宗開祖の大日房能忍の禅とも相まって、禅は急速に普及していったが、そうした動きを快く思わな

『興禅護国論』は
形骸化した既存宗教への
批判か、助言か

『興禅護国論』

建久9年(1198)、明庵榮西筆、
国立国会図書館蔵



榮西
禅を日本に広めた
臨済宗の宗祖

鎌倉幕府の初代將軍源頼朝より博多の地に八町(900m四方)の土地の寄進を受け、建久6年(1195)に聖福寺を創建した。宋から帰国後、比叡山延暦寺をはじめ既存の宗教団体から冷遇され、京都に入ることもままならなかつた榮西は、九州各地に禅寺を建立した。
『興禅護国論』は、聖福寺創建から3年後の建久9年(1198)に著されたが、その翌年あたりに鎌倉入りしている。そして、頼朝の正室北条政子や2代頼朝、3代美朝らの信頼を得て、頭角を現すようになる。『興禅護国論』の中で榮西は、自分こそが伝教大師最澄の教えを忠実に守る王道だと言い切っている。比叡山の衆徒にしてみれば、お株を奪われたようなものである。
肖像画などを見ると、一見温和で物静かそうな宗教者というイメージだが、榮西の内面に持ち合わせている激しい一面が垣間見られる。
『興禅護国論』は臨済禅の教書と評されているが、その根底には古くは形骸化した既存宗教に対する批判があり、自分こそが最先端を行つていふという自負心があったのかもしれない。



聖福寺
建久6年(1195)、源頼朝から寺領を授かり、榮西が創建した日本初の禅寺。後鳥羽上皇より、日本で最初の禅寺を意味する「扶桑最初禅窟(ふそうさいしよぜんくつ)」の号を賜った。



北条政子
〔保元2年(1157)〜嘉禄元年(1225)〕源頼朝の正室で、北条時政の長女。頼朝亡き後は出家して、尼御台(あまみだい)(法名は安養院あんによういん)と呼ばれたが、藤原頼経(よりつね)の後見となり幕府の実権を握つて豪腕をふるつたことから、尼將軍とも呼ばれた。



聖福寺
北条政子が創建し、榮西は初代住職に招聘された。鎌倉五山第3の位を有し、本尊に釈迦如来をまつた。

寺・報恩寺(福岡市)、専光寺(福岡県糸島市)などがある。中でも、鎌倉幕府初代將軍源頼朝から博多百堂跡地を賜つて創建された聖福寺は、日本で初となる禅寺である。山門には「扶桑最初禅窟」という勅額が掛かつている。これは、榮西の偉業を称え、後鳥羽上皇から下賜されたものである。
建久9年(1198)『興禅護国論』を著したその翌年頃に、榮西は鎌倉に入る。そして、鎌倉幕府に急速に接近していく。
正治2年(1200)源頼朝の妻北条政子は、榮西のために聖福寺を建立し、住職として招聘した。また、建仁2年(1202)鎌倉幕府第2代將軍源頼朝は榮西を開山として、建仁寺を京都に建立させる。このと

き、58歳を迎えた栄西は、鎌倉幕府の庇護を受け、ようやく京都に活動の足がかりを得たのであった。

権力との結びつきは 禅普及のための手段?

権力との結びつきによって存在が増していった栄西は、東大寺の勸進職にまで昇り詰める。そして、禅宗普及のため、中国から多くの禅僧を招き入れ、南宋に始まる五山の寺院

制度を定着させた。

これによって日本国内には多くの臨済宗派が誕生し隆盛を極めることになるが、臨済宗における栄西の存在は他派の開祖の陰に隠れてしまい、目立たない存在となってしまう。

他の宗派に見られる開祖を絶対的存在として崇めるようなカリスマ性を、栄西に見てとることはできない。そのことから考えると、栄西は決して権力志向の強い宗教者ではなく、



法堂 はつどう

明和2年(1765)の上棟。仏殿兼用の「拈華堂(ねんげどう)」で、正面須弥壇には本尊釈迦如来座像と脇侍迦葉尊者(かしようそんじや)・阿難尊者(あなんそんじや)が祀られている。天井には創建800年を記念して、平成14年(2002)に「小泉淳作画伯」による双龍が描かれた。

建仁寺三門 けんんにんじんもん

空門・無相門・無作門の三解脱門。現在の三門は大正12年、静岡県浜名郡の安寧寺から移建された。「御所を望む楼閣」という意味から「望閣楼」と名づけられる。

あくまでも純粹に禅の普及に務めるため、単に手段として権力を利用したと言えなくもない。

禅と茶を広めた 文化的先導者

晩年の栄西は禅の教えを説く傍ら、南宋から持ち帰った茶を普及するため、『喫茶養生記』を著している。栄西は2回目の入宋から帰国する際、茶の種を持ち帰り、筑前の背振山(佐賀県背振村)に植えており、これが「岩上茶」の起りりとされている。また、梅尾の明恵上人に茶種を贈ったことから「梅尾茶」が始まったと言われている。宇治茶は、梅尾から移されたものである。

喫茶と禅宗の伝来とは深い関係がある。禅宗僧侶の集団修道生活の規則は、中国ではすでに唐代に確立され、「清規」と呼ばれた。清規とは清

浄な状態に保つための禅僧の規則であり、その一つに茶礼・点茶・煎茶や茶に関する儀式がある。また、坐禅の際の茶礼は、眠気覚ましの意味があり、禅宗とは切っても切れないものであったという。

坐禅修行に限らず、一般に対して、茶には医薬的効能があり、延命・長寿をもたらす良薬であると、『喫茶養生記』には記されている。

すべての人の健康と幸福、そして国家安泰を願い、さらには腐敗した天台宗の再興を目指して南宋に2度もわたり、遂には臨済宗黄竜派の印可を持ち帰って、日本に禅宗を広めた千光師祖明庵栄西禅師。

『喫茶養生記』を記した4年後の建保3年(1215)、建仁寺で示寂。その前年、道元は栄西と謁見し、禅の歴史は、ここで栄西から道元に引き継がれることとなる。

宋から飲茶文化を 持ち帰り茶を広く 普及させた茶祖

『喫茶養生記』

建保元年(1211)、
国立国会図書館



禅を日本に広めた
臨済宗の宗祖

栄西

『喫茶養生記』は、栄西晩年の建保元年(1211)に書かれた。日本に飲茶文化をもたらした普及させたのが、栄西である。日本に茶の種がもたらされたのは、奈良時代以来遡る。平安時代には、一部の上流階級のみへ愛飲されていた。それを一般に普及させたことにより、栄西は別名「茶祖」と呼ばれるようになったのである。

『吾妻鏡』によると、鎌倉幕府第3代征夷大将軍源実朝が二日酔いで苦しむ身を案じて、栄西が献本したと記されている。上下2巻からなる『喫茶養生記』の上巻には、茶の種類や抹茶の製造方法、喫茶の効用が解説されている。また、下巻は桑の効用を解説しており、糖尿病、中風、食欲不振、瘡、脚気の五病に対する医学書的な内容になっている。

建仁寺の境内には、栄西禅師の功績を顕彰し、後世へと伝えるための「茶碑」が建立されている。



茶碑

建仁寺三門東側に茶碑があり、その傍らには、桑碑も立つ。



双龍図

建仁寺開創800年を記念して、平成14年(2002)法堂の天井に描かれた双龍図。大きさは縦11.4m×横15.7m(畳108枚分)もの大きさがあり、2年の歳月を費やして完成した。



方丈

慶長4年(1599)、恵瓊(えけい)が安芸の安国寺から移築した。優美な銅板葺の屋根が印象的な禅宗方丈建築。堂内の襖絵全50面を、桃山時代から江戸時代にかけて活躍した絵師の海北友松の水墨画が飾る。また前庭の枯山水様式の「大雄苑(だいおうえん)」が訪れる人を迎える。

建仁寺に確固たる禅宗の
礎を築いた栄西のもとには、
多くの仏徒が集まった

- 栄西関連年表 ●
- 永治元年(1141) 4月20日備中・吉備津神社神宮の子として生まれる。
 - 久安4年(1148) 8歳で出家を志す。
 - 仁平元年(1151) 安養寺・静心和尚に師事。
 - 仁平3年(1153) 比叡山にのぼる。
 - 比叡山(1154) 比叡山で受戒し、栄西と称す。
 - 平治元年(1159) 有弁から台教を学ぶ。
 - 仁安3年(1168) 阿蘇山にて入宋渡海を祈願。4月入宋、9月帰朝。天台座主明雲に天台章疏を呈す。
 - 嘉応元年(1169) 備中に清和寺を建立。
 - 文治3年(1187) 再入宋・虚庵懐敏に師事。
 - 建久2年(1191) 虚庵懐敏から印可を授かる。7月平戸葦浦に帰着。
 - 建久3年(1192) 筑前香椎に建久報恩寺建立。初めて布薩式(ふさつしき)を行う。
 - 建久6年(1195) 博多に聖福寺創建。
 - 建久9年(1198) 『興禅護国論』を著す。
 - 正治2年(1200) 鎌倉・寿福寺の住持となる。
 - 建仁2年(1202) 建仁寺創建、開山となる。
 - 元久元年(1204) 建仁寺僧堂造営、『日本仏法中興願文』を草す。
 - 建永元年(1206) 東大寺勸進職に任ぜられる。
 - 建歴元年(1211) 『喫茶養生記』を撰す。
 - 建保2年(1214) 道元、栄西に相見。『喫茶養生記』を源実朝に献じる。
 - 建保3年(1215) 7月5日、建仁寺に寂す(鎌倉の寿福寺という説も)